

平織布「銘仙」の特徴と魅力の解明

Elucidation of the characteristics and attractiveness of plain weave "Meisen"

守屋 早希子
Sakiko Moriya

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 修士課程

キーワード：銘仙，着物，平織

Key words : Meisen, Kimono, Plain weave

1. 研究目的

銘仙は、江戸時代後期から昭和初期にかけて多くの人が着用した平織りの絹織物である。大正時代以降、鮮やかな色彩と大胆な柄になったことにより、特に若い女性の間で流行となった。近年、若い女性の間で再びそのデザインが注目され、銘仙が見直されつつある。しかし多くは、古着のコーディネートやリメイク小物など、古着や端切れの再利用にとどまっており、銘仙の産地で新たに作られる織物は少なく、一般的な呉服屋で販売されることは少ない。

銘仙の産地として、足利、伊勢崎、秩父、桐生、八王子が関東五大産地とされているが、現在は秩父と伊勢崎での生産に限られている。しかし、産地では、資料館での展示やイベントなど銘仙の復興や後継者の育成にも取り組んでおり、銘仙の技術や魅力を次世代に残す取り組みをしている。また、2016年には日伊国交樹立150周年を記念し、「VIVID MEISEN-la sfavillante moda kimono moderna-」展がローマ日本文化会館で開催された。ヨーロッパで銘仙の文化を紹介した初めての試みであった。

銘仙の研究は模様や流行についての研究が多く、機能性や着心地についての記述はあまり見られない。しかし、銘仙の縞模様を作る技術である、ほぐし捺染は、1908年に特許が取得された技法であり(14632号)、1913年には解し織りが特許を取得している(24612号)。また、秩父銘仙が2013年に国の伝統的工芸品に指定されるなど、銘仙の織物としての価値は注目すべきである。

そこで、銘仙を科学的に研究することで、織物としての価値を見直すことができるのではないかと考え、本研究を行うことにした。様々な視点か

ら銘仙について考察し、その魅力を発見したいと考えた。

2. 研究実施内容

研究に際し、銘仙の試料を2点用意した。銘仙布の諸元を表1に示す。

表1. 試料諸元

	織物厚さ (mm)	織物質量 (g/m ²)	織糸密度 (本/cm)
銘仙1	0.197	81.7	タテ 85.3 ヨコ 68.0
銘仙2	0.217	83.8	タテ 87.7 ヨコ 69.0

銘仙1 計測時 温度 22.5°C 湿度 42%

銘仙2 計測時 温度 22.3°C 湿度 35%

銘仙について文献調査と産地での調査を行った。銘仙は、出荷できない屑繭などを使用して自家用に織られていた太織が元と言われている。銘仙の産地とされている地域はもともと養蚕や絹織物の盛んな地域であった。銘仙の生産量は、地域によって異なり、関東五大産地と呼ばれた経緯についても謎である地域も存在する。しかし、関東を中心とした織物の産地で、数多く生産されてきた。開国に伴い日本の生糸の需要が高まり、さらに養蚕業が増加し、屑繭の量が増え、絹紡糸を原料とした銘仙が産業化することになった。その後、複雑な模様を表現する新技術の発達や力織機の普及も産業化に大きな影響を与えた。このように銘仙は、安価でデザインの優れた絹織物となった。

銘仙の魅力の一つであった価格について明治末

年から大正6年に流行していた着尺地の価格が記載されている書籍をもとに検討した(坂野素六・辻合喜代太郎『呉服太物流行柄綴』1985 関西衣生活研究会)。産地が伊勢崎の銘仙6点は、7円95銭1点、8円20銭2点、8円50銭1点、11円90銭1点、13円50銭1点と物によって価格に差があった。秩父の銘仙は7円50銭1点、7円70銭1点、9円50銭3点であった。ここでの着尺地の最高額は八王子産の優秀織43円であり、最低価格は岩国産の岩国縮1円90銭、次いで遠州産の漣織1円95銭である。岩国縮や漣織は木綿の織物であり、絹の織物に比べると安価である。当時、木綿の生産が増え、唐棧の流行もあったことから、木綿の織物の掲載も多い。御召は種類が多く、羽織やコート用を抜いても80点以上あった。価格も種類によって様々だが、20円から28円くらいが多くなっている。御召の最高額は、京都産の優彩御召33円であった。この結果から、銘仙は木綿の織物より価格は高いが、御召と比べると価格が安いことがわかる。高価な絹織物とは異なり、普段着や制服といった日常的な衣服として、銘仙が流行していくということが価格からも推測することができる。

3. まとめと今後の課題

銘仙が誕生してからどのように大衆に受け入れられ発展してきたのかが明確になった。開国後の激動の中で発展した銘仙は、新たな技術と大量生産、低価格と多彩なデザインを実現し、大衆の心を掴んできた。縞や格子模様から、新たな技術によって生み出された複雑な模様でデザイン豊富な銘仙が、多くの人々の日常着、外出着として着用された。

次第に、和服から洋服に変化し、日常着として着物を着用する人が減った現代では、着物は人生のセレモニーで着用する晴れ着や礼装となっている。日本での絹製品の需要の落ち込みから、今では、日本の養蚕農家数や繭生産量、生糸生産量も減少している。さらに、生糸や絹糸の輸入も減少しているのである。このように、絹織物自体が減少していく中で、どのような魅力を持ち、大衆の中で銘仙が発展していくのかということが重要であると考えた。これまでの魅力の発見と共に、これからの社会でも銘仙が受け継がれるような、新たな価値を発見することを今後の目標としたい。

この結果をもとに、銘仙の織物としての特性をさらに掘り下げ、他の織物との比較検討を行っていくことを課題と考えている。

参考文献

論文

- ・山内雄気(2018)「大衆商品「模様銘仙」の登場」、『同志社商学』69(6) p.1323-1339
- ・安蔵裕子(2012)「昭和初期の新聞・雑誌記事にみる「銘仙」について」、『學苑』863, p.59-131

図書

- ・大森哲也・新井正直・沢辺満智子『VIVID 銘仙：煌めきの着物たち「大正ロマン」から「昭和モダン」へ』足利市立美術館監修 青幻舎(2016)
- ・坂野素六・辻合喜代太郎『呉服太物流行柄綴』関西衣生活研究会(1985)